

機関番号：14601
 研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2008 ～ 2010
 課題番号：20330185
 研究課題名(和文) ユネスコの提起する世界遺産教育の教育内容と教育方法の創造
 研究課題名(英文) Creation curriculum and instruction of World Heritage Education suggested by UNESCO

研究代表者

田淵 五十生(TABUCHI ISOO)
 奈良教育大学・教育学部・教授
 研究者番号：10179864

研究成果の概要(和文)：成果の概要は、以下の3つである。一つは、なぜ、ユネスコが世界遺産教育を提起するに至ったのかについて歴史的経緯を明らかにしたことである。二つは、茫漠とした世界遺産教育の概念定義を行ったことである。即ち、「世界遺産についての教育」、「世界遺産のための教育」、「世界遺産を通しての教育」である。最後の成果は、ESDを視野に入れた世界遺産教育の具体的な教材開発を行ったことである。

研究成果の概要(英文)：Abstracts of this research is consisted of 3 parts. First one is to clarified historical back ground why UNESCO had advocated World Heritage Education. Second one is to conceptualize World Heritage Education. They are "Education about World Heritage", "Education for World Heritage", and "Education through World Heritage". Third one is to make teaching materials of World Heritage Education incorporated with ESD.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2009年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2010年度	2,300,000	690,000	2,990,000
年度			
年度			
総計	9,200,000	2,760,000	11,960,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教科教育学

キーワード：教科外教育(総合的学習、道徳教育、特別活動) 世界遺産教育 ユネスコ ESD 持続可能な開発のための教育 持続発展教育

1. 研究開始当初の背景

1994年、ユネスコは世界の教育現場に向けて"World Heritage Education"(「世界遺産

教育」)の推進を呼びかけていた。そして、2005年には"Education for Sustainable Development"(略称ESD=持続可能な開

発のための教育)と結びつけて推進する状況であった。

けれども、日本の教育現場では、ユネスコの訴えは顧みられことが無かった。「世界遺産教育」という用語自体、「市民権」を得ていなかった。さらに{ESD=WHAT?}の状態であった。残念ながら、世界遺産教育やESDが緊急な教育課題として受け止められていなかったのである。

さらに、それらの教育課題を実践しようとする教育現場も当時は存在しなかった。そこで、日本のユネスコ国内委員会は、ユネスコの“Associated School Projects for UNESCO”(略称ASP)に注目した。

ASPについて言えば、当時は「ユネスコ協同学校」という名称で呼ばれ、参加校も二十数校に過ぎなかった。現在ではASPは「ユネスコスクール」と略称されるようになっている。ユネスコの事務総長を選出している日本のASP活動はほとんど行われていなかったのである。

2. 研究の目的

申請者は、世界遺産教育に取り組むことを通して、日本のユネスコスクールの活動を活性化しようと考えた。そのために、奈良教育大学、奈良市教育委員会、奈良国立博物館と連携して、以下のことを立案した。

一つは、世界遺産教育の必要性を日本の教育現場に浸透させることであった。そのためには、ユネスコがなぜ世界遺産教育を提唱したのかについての歴史的経緯の説明からはじめなければならなかった。次は、「世界遺産教育とは?」という「そもそも論」から出発して世界遺産教育の性格を明確に示すことが必要であった。

1972年に「世界遺産条約」が締結されて1992年に日本の加盟まで20年間の空白期間があった。先行研究や先行実践は皆無であり、その意味で、手探りの状況、ゼロからのスタートであった。

とりあえず、申請者が居住する地域の世界遺産「古都奈良の文化遺産」を題材に教材開発を行う教材作成チームを設立しようと考えた。奈良市教育委員会の中澤静雄指導主事を中心にして教材作成作業部会が設立され副読本の刊行を期した。

二つは、開発教材を実践にかけ、実践の事実の中から、世界遺産教育の共有財産化を図ろうと考えた。そのために、教材開発者たちが実践を持ち寄って協同討議をする「世界遺産教育実践研究会」を組織して、「そのような実践ならば、私達にも実践可能だ」と納得できる教員同士の学び合いの機会を保障しようと考えた。それが「世界遺産学習実践研究会」の開催であった。

3. 研究の方法

まず、ユネスコが1998年に作成した教師用の「世界遺産教育キット」を批判的に読み込みユネスコの世界遺産教育の目標、内容、方法を明確にする文献調査を行った。

次に国内と海外の世界遺産サイトへのフィールドワークを行った。

そのような調査に基づいて、世界遺産「古都奈良の文化財」を題材にして副読本を作成することであった。そして完成されたテキストを用いて、奈良市内の小中学校で実践に付き、実践の事実を通して獲得した知見を『世界遺産学習ティーチャーズガイド』として刊行することであった。

最後に、日本のどの地域でも実践可能な共通の教材キットを作成することであった。

それらの成果を集大成して、最終年度に、世界遺産を持つ他の地方自治体の教育委員会に呼びかけて「世界遺産学習全国サミット」を開催することであった。いわば奈良の経験の全国発信を目指すものであった。

4. 研究成果

成果は無数である。その第一は、ユネスコの提起する「World Heritage Education」と「Education for Sustainable Development」(略称ESD)を結びつけて世界遺産教育の概念を明確に示したことである。即ち、茫漠とした世界遺産教育をサブカテゴリー化して、「世界遺産についての教育」、「世界遺産のための教育」、「世界遺産を通しての教育」として分類して、実践内容の枠組み作りを行ったことである。

その知見は日本国際理解教育学会の紀要『国際理解教育』第15号に掲載され、世界遺産を通してESDを実践する教育現場が急増した。

さらに、ユネスコのアジア・太平洋地区を統括するユネスコ・バンコク事務所が教師用書として刊行した“INCORPORATING EDUCATION FOR SUSTAINBLE DEVELOPMENT INTO WORLD HERITAGE”の第3章に“localizing WHE With ESD: Pedagogy, Practices and Challenges”と題して世界に発信されている。

その第二はユネスコスクールの急増である。2007年当時、二十数校に過ぎなかったASP校が2010年には二百校を超えるまでになった。それらの加盟校では世界遺産を切り口にしてESDに迫る実践が推進されている。

その第三は、奈良市の教育委員会と連携して、世界遺産「古都奈良の文化財」についての副読本『奈良大好き世界遺産学習』を刊行したことである。この副読本は奈良市内の全小中学校に配布されて、全校で15時間かけて実践する「世界遺産学習」態勢が構築され

たことである。

その第四は、市内の実践者たちがそれぞれの実践を持ち寄り「世界遺産学習実践研究会」を組織して、お互いの実践を高めあうシステムが確立されたことである。そのプロセスの中から、過去の優れた実践事例を集約した教師用の『世界遺産学習 ティーチャーズガイドⅠⅠ、Ⅱ、Ⅲ』が刊行された。

この実践研究会は、国内で世界遺産を持つ他の自治体に呼び掛けて「世界遺産学習全国サミット」に発展した。「全国サミット」では、幼稚園から大学まで24本の実践報告が12の分科会で行われて、参加者は800名を超えた。さらに、法隆寺、姫路城、宮島、石見銀山などの世界遺産を有する地方自治体の教育委員会、堺市や橿原市など暫定遺産に登録された地方自治体の教育委員会の合計13教育委員会の代表が「世界遺産学習連絡協議会」を結成して、世界遺産教育の全国化が確認された。

その第五は、日本ユネスコ協会連盟と連携してDVDやワークシートなどから構成される教材キット『守ろう世界のたからものー豊かな世界遺産編ー』を作成して、全国の教育現場に届けることができた。配布された教材キットを使用した実践研究会が2011年度から全国的に展開予定である。さらに、この成果は国内にとどまらず、ユネスコのパリ本部に送られて英訳と中国語訳されて、世界中に発信される予定である。

今後の展望として「地域・世界遺産教育」という新しい概念でESDに迫る実践を展開したいと考えている。なぜなら「世界遺産がある地域だから実践可能である」という指摘があるからである。

それは謬見である。どの地域にも人々が誇りにする大切な文化遺産がある。また、美しい景観がある。そのような地域の文化遺産や自然遺産を次世代に伝えるバトンリレーのランナーとしての当事者意識を育成する教育はESDにつながっている。

「地域・世界遺産教育」という切り口からESDに迫る教育は全国どこでも取り組める普遍性を持っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ① 田淵五十生 山下欣浩 日本ユネスコ協会連盟の教材キット「守ろう地球のたからもの」ーその作成意図と具体的事例ー奈良教育大学教育実践センター紀要 査読有 巻19 2010 135-144
- ② 田淵五十生 谷口尚之 世界遺産教育に

おける授業モデルづくり 奈良教育大学紀要 査読有 巻59 2010 85-100

- ③ 田淵五十生 社会科と世界遺産教育ー大学における社会科教育法の実践記録ー奈良教育大学教育実践センター紀要 査読有 巻20 2011 215-225
- ④ 淡野明彦 高等学校地理学習における世界遺産の指導の実際 奈良教育大学教育実践センター紀要 査読有 巻19 2010 11-18
- ⑤ 大山明彦 75金堂の支輪板復元、76金堂の扉復元絵 『国宝 鑑真和上展』 図録 奈良国立博物館 査読無 2009 172,233
- ⑥ 田淵五十生 世界遺産教育の可能性ーESDを視野に入れてー 国際理解教育 査読有 巻15 2009 88-104
- ⑦ 田淵五十生 地域学習としての「世界遺産教育」 奈良教育大学紀要 査読有 57巻 2008 129-140
- ⑧ 淡野明彦 世界遺産と観光に関する地理学的アプローチ 地理空間 査読有 巻1 2008 114-127

[学会発表] (計2件)

- ① 田淵五十生 世界遺産教育と社会科教育 全国社会科教育学会 2010 10 同志社大学
- ② 田淵五十生 世界遺産教育を切り口にしたESD 日本国際理解教育学会 2008 6

[図書] (計3件)

- ① 田淵五十生 東山書房 世界遺産教育は可能かーESD(持続可能な開発のための教育)をめざしてー 2011 88
- ② 田淵五十生他 児島書店 社会科教育と世界遺産教育ーESDのツールとしてー『児童教育学を創る』 2011 273-292
- ③ Isoo TABUCHI 『INCORPRATING EDUCATION FOR SUSTAINBLE DEVELOPMENT INTO WORLD HERITAGE』 UNESCO Bangkok 2010

[その他]

ホームページ等

<http://www.unesco.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田淵 五十生 (TABUCHI ISOO)

奈良教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10179864

(2)研究分担者

西山 厚 (NISHIYAMA ATSUSHI)
奈良国立博物館・学芸部・学芸部長
研究者番号：10167570

森本 弘一 (MORIMOTO KOUICHI)
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：70243350

淡野 明彦 (TANNO AKIHIKO)
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：30127419

山岸 公基 (YAMAGISHI KOUKI)
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：90242792

大山 明彦 (OOYAMA AKIHIKO)
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：70324952

岩本 廣美 (IWAMOTO HIROMI)
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：40243349